

**「平和に生きる生存権の確立を目指して—日本国憲法を**

## グローバル・コモンズにー

## 3月3日大阪労働学校 コモンズ公開討論会

## <第2回> 大脇雅子 弁護士

人権としての〈平和的生存権〉運動こそ  
非暴力闘争と結び、世界の戦争を抑止する

■大阪労働学校ソシエより　大脇さんの今回重要点は、占領軍の策定した日本国憲法を受容するのではなく日本の民衆が明治近代以降、帝国日本との国家に対抗し、非暴力抵抗の運動の歴史を紡いだそれら成果として、民衆の手に奪い返してというところにある。前回バスターリッテンさんの「米国憲法は、日本国憲法をモデルにして民衆の手で取戻す論考」これだけの動きが重なるところに「新しい日本関係が生まれ」：それらは「東アジアの民衆運動」とつながり、まさに沖繩の民衆運動こそその節点点となる」との、極めて重要な視座が今回の労働学校ソシエウムから提起されたことを誇りとした。

25年間の弁護士生活のうち62年間の弁護士として活動し、去出版した『武力によらない平和を生きた』非暴力抵抗と平和的共存権Ⅱ面参照を中心にお話ししたい。

憲法のできた1946年（略）第3章の基本的人權の各条文は、強制労働の禁止、生命の危険にかつ幸福の追求権というものを経、憲法全体の平和主義の精神から紡ぎ出されてきた。

制）では法制化した安保法（自衛権の枠内を超え一部集団的な自衛権の行使を許すという法制で、私たちはこの安保法は、法学的クイデーターであるとして25の訴訟が23の裁評で継続し

願権の空文化が進んでい最大の害が要る。懸ねる事件などと言われている事件は、よく見れば官軍の弾圧行為があるから、そういう状況になるのもう、非暴力のクイデーターがかくも覆うという隠されているかという

天皇制の中心として軍国主義という拡張性が磨き上げてきたが、昔からの平和思想の根柢的な理念を受け継いだ形でアメリカのインシアティブで憲法ができた。戦(略)2019年国連総会で「平和への権利宣言」というものを採択し、こんな平和の生存権の日本のみならず世界の発展というものは合理的に開示しつつあるが、現状は真反対の世界状況、残念な思ひは国会の「請

一つの訴訟を担当して各都府県から約500名の機動隊が沖縄の高江米軍ヘリバッド工事のため総動員を行動させたという市民運動を統制する役割で愛知から機動隊一

た原告は全国合わせて761人、弁護士は1865名、憲法9条の平和的生存権の侵害による訴訟を長い間続断、現在に至る(略)論議、議員時代での

00名人が派遣された。その事件の監査請求から第審・最高裁と約7年くらい担当し、沖縄の非暴力抵抗の伝統というものを初めて根柢から知った。

第2審で逆転勝訴し、徹底た高江村の現場において、非暴力抵抗に対して、派遣された000名の機動隊は銃を封鎖し、通行を妨害集会で囲い込み暴力を振る。基地正面で人々を突き落し失神させ、様々な暴力行為をそれぞれに裁判所はデモの排除における暴力というものは違法の疑いという判決だった。

そこで学んだ非暴力抵抗というのは非常に感動的な、伊江島の非暴力闘争で、阿波根昌鴻（あはこんしようこう）という方がガンジー非暴力闘争を中心に伊江島のたちと戦ったのです。※阿波根昌鴻の詳細同氏著書は6面参照）

激戦の後、1947年強制的に各村人たちが自分たちの村に帰った時に、村の63%が軍用地で接収され、貧困の底に民たちが落ちるわけで、阿波根さんたちが村民を組織米軍に交渉を始める。その交渉を始める際の、伊江島の陳情規程というものを讀み上げさせていた。

それはまず、

- 一、反米的にならないこと
- 一、怒ったり悲しみをいわないこと
- 一、必要なき以外はみだりに米軍にしゃべらないこと
- と正しい行動をとること

ウソ偽りは絶対認めないこと。

一、会談のときは必ず座ること。

二、集合し米軍に対応するときは、モッコ、鉋、鋤切れその他を手に持たないこと

と、耳より止まを上げないこと。米軍はわれわれが手をあげるた暴力をぶるったというて写真をとる。

一、大きな声を出さず、静かに

に相当する。一人、人道、道徳、宗教の精神と態度で、折衝し、布令・布告を頒つた法規にとらわれず、道理を通して訴へる人。

一、軍を恐れてはならない。

一、人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍に優つてゐる自覚を堅持し、破壊者である軍人を教導し心構えが大切であること。

一、このお願いを通すための規定を最後まで守ること。

これはまさに沖縄の非暴力抵抗のバイブルで、これを岡田根拠には自分が作ったものではない。村人たちが長期的に自分たちの行動規範をまとめたことだ。誰も代表者にはならない。誰もが代表者なのだ。誰か代表者を決めるとその人が狙われ、全ての人が全員代表者としての自覚のもと……といふことで1955年に今川旗を立て那覇まで沖縄全土に対して「食行禁

私たちは米国のために食糧になつたのだとて、その食糧を食ふのをやめ、平和運動がふるくみの基地反対闘争へ発展して行へ。

この陳情規定は、私が辺野古の海に座込みに行つた時もどいて配られ、高江村紛争の地に来た時にも大きな看板での陳情規定が書かれており隣に「平和的生存権を守る」といふ看板があつた。

沖縄の人たちの闘いははたしてこの形の態が伝授されい。

それを鑑に日本本土の闘いを「基地反対闘争」などを見てみれば砂川裁判、これは伝導してゐる。私たちは戦後行つたストライキ運動も継続されてゐる。「平和的生存権」といふものは、非暴力抵抗などには異化しない。

非暴力という手段で「平和的生存権」は強化し維持されていくという確信に

至った。非暴力抵抗というものについては、国際的にも支持があり、ハーゲの平和会議では……1909年、平和憲法を世界が自分たちの憲法で引き継ぎをしようという決議がされ、金大中がムジュン、キム・スダンがキム・フィリップのアキノさんという様々な政治家が集まって軍縮会議を行って、そこで今日の平和憲法をラッパの憲法ト……という運動をしたことがある。

今日日本では、平和的生存権は司法的には否定されようとしていて、市民運動の中で平和的生存権を人権として非暴力闘争に結びつき、全世界が連帯し今起きている戦争……起きようとする戦うの危機に対して私は反対する。……今こそ私の時ではないかと言っているが私の意見であり皆さんにも頑張っていたきたい。

終

終

う画期的なが、日本社会は思想的にはまだ：拡張性や天皇制、憲法ができてくると自衛隊が発足するという矛盾を抱えながらも平和を求める国民に浸透し人権概念に引き継いで行った。

世界：の国民が等しく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有する」と明確に規定がある。

（略）：安倍内閣閣内決定で和の生存権を初めて裁判で主張したのは、99年の「湾岸日本主張が多国籍者のイラクへ派兵で16億ドルを支援したのに対し、名古屋の49名が原告となり平和的生存権は損害」というで国に対し1人当たり1万円の損害賠償請求をした事件からだ。

# への道を拓く 主義の運動

生きる世界に向かって【連載③】  
齊藤日出治(大阪労働学校アソビ工学長)

昭和の初期に旧京都帝国大学医学部の人類学者金岡丈夫が沖繩興今帰仁村の百按司墓から遺骨を盗奪したに因つて琉球民族の子孫がその遺骨を京都大学に返還するよう

骨返還訴訟では、遺骨を學術研究の對象としての盗奪を正當化する京都公立學術研究機關日本人類学会に対し、先住民の遺骨先住民に返還するの義務を課すべきことを主張している。

この裁判で、司法は原告主張を退けたが、琉球民族遺骨を返還することにいて双方で協議すべき、という付言を加えている。

関東大震災から100年の

る社会の分断、浮き彫りにしてゐる。

だが、このような虐殺の事実究明と責任追の動きと並行して、1900年を契機にこのような運動のなから、植民地主義にもつてひととひとのつながりを刷新しよう、それにと代わるものひとつのつながりを創造しようとする胎動があられた。

歴史が、アジアの近隣への動は、日本の近代100年の歴史で、アジアの近隣への歴けただけなら、琉球、アイヌ、被差別部落、水俣病患者、ハンセン病患者、障害者などの社会弱者を劣位となし、命を連れた世界観から出現したものとみなす。このような100年の歴史を振返ると、これからの100年を生きとし生けるものすべてが豊かに

死者を生きたるとは「不条理な死を強制された死者の苦悶と怒りに寄り添い、死者と共に歩むこと」(100頁)であり、死者を切り捨て成長の関数となった自己の生を拒絶して、脱成長というもうひとつの生の世界に足を踏み入れることである。これに対して、成長を追求する世界の生は生か

生は生

武力によらない平和

非暴力抵抗と

平和の生存権



大品准子

大凡牙



大脇雅子弁護士と  
著書「武力によらない平和を生きる」

# 脱成長社会への道を拓く

# 脱植民地主義の運動

—死者とともに生きる世界に向かって【連載③】

齊藤日出治(大阪労働学校アソシエ学長)

昨年は、この混乱時に殺害された数千人を超えるとみられる朝鮮人・中国人の犠牲の事実究明と日本政府の責任追及を求める運動が高揚した。だが日本政府は、100年後の

いまでもお虐殺の事実を裏付ける資料がないことを理由にして、犠牲者への謝罪や補償はもとより、虐殺の事実認定そのものを拒み続けている。(このまなかに起きた埼玉県

福田村の村民による四国香川の行商人一行の殺害事件「福田村事件」も、植民地主義によ

八、関東大震災で武装した日本の軍隊、警察、関東住民に命を奪われた朝鮮人・中国人とつながる運動―百年大芸能祭

「花岡事件」をはじめとする  
4万人にのぼる中国人の日本  
への強制連行・強制労働の犠  
牲者の調査・追悼の活動が反

は死は生と分離された廃棄物  
処理の世界であり、映画『プ  
ン75』が描くような合理的で  
効率的な無機質な世界を肥大

「制度化された社秩序」のもとで醸成されたレイシズムの産物である。

これに対して、虐殺—00年契機に出現した「百年大正警察」を宣言する民衆連日中草の根交流会発行、200

生命がつながりあい生と死が表裏一体に結びつく世界を集合意識として創造する運動を抜きにして、脱成長の世界を招来するといはずなぞ。

(16回、終わる)

---